

埼玉医科大学保健医療学部臨床検査学科

小野川 傑*

I. 本学の沿革

埼玉医科大学は1892年(明治25年)に埼玉県西部の入間郡毛呂村(現 毛呂山町)に設立された毛呂病院が前身であります。当時の毛呂病院は精神科・内科・伝染病科のみを開設していましたが、第二次世界大戦後まもなく起こった近くを走る鉄道(旧国鉄、現JR八高線)での列車脱線転覆事故にて、要請を受けて救急医療を施すも、多くの死傷者を前に満足な治療ができなかったことを契機に、地域医療の重要性を鑑みて総合病院へと移行する決心をしました。この総合病院が後の埼玉医科大学の母体となります。

1971年(昭和46年)に埼玉県内にも医科大学を設立する動きに応える形で埼玉医科大学の設置許可申請を行い、翌1972年(昭和47年)埼玉医科大学が開学しました(毛呂山キャンパス)。当初は医学部だけの単科大学でしたが、1973年(昭和48年)に埼玉医科大学附属医学技術専門学校を開校しました。医学教育を開始して1年後に早くも臨床検査技師の教育がスタートしたのは特筆すべきことです。

1989年(平成元年)埼玉医科大学短期大学(看護学科、臨床検査学科、理学療法学科)を開学、2006年(平成18年)毛呂山キャンパスからほど近い場所に日高キャンパスを開設し、保健医療学部(看護学科、健康医療科学科、生体医用工学科、

2007年に理学療法学科;川角キャンパス)を増設、臨床検査技師養成教育を4年制としました。2010年(平成22年)埼玉医科大学大学院医学系研究科修士課程を設置し、臨床検査学教育を修めた学士が修士へ進む道が開かれました。2015年(平成27年)健康医療科学科を臨床検査学科に、2018年(平成30年)生体医用工学科を臨床工学科にそれぞれ名称変更しました。「生命への深い愛情と理解と奉仕に生きるすぐれた実地臨床医家の育成」を建学の理念としてきた埼玉医科大学は2022年(令和4年)に創立50周年を迎え、翌年2023年(令和5年)埼玉医科大学における臨床検査技師養成教育の歴史は、前身の附属医学技術専門学校の開設から50周年を迎えました。

II. 埼玉医科大学保健医療学部臨床検査学科 について

埼玉医科大学における臨床検査技師養成教育の歴史は長く、2022年に50周年を迎えたことは前述の通りです。大学教育が開始された当初の臨床検査技師養成教育は、保健医療学部健康医療科学科のなかのコースとして始まりました。その後、2015年(平成27年)に臨床検査学科に名称変更し、臨床検査学教育を中心とする学科教育がスタートしました。

保健医療学部臨床検査学科は埼玉医科大学国際医療センターを有する日高キャンパスにあります

* 埼玉医科大学保健医療学部臨床検査学科 onogawa@saitama-med.ac.jp



写真 1-1 埼玉医科大学日高キャンパス全景
手前が国際医療センター、右奥が保健医療学部校舎



写真 1-2 保健医療学部校舎

(写真 1-1, 1-2)。国際医療センターはおもにがん・心臓病・脳卒中および救急医療に特化した病院で、国内で 11 施設しか認定されていない心臓移植実施施設でもあります。キャンパスでは救急車のサイレンやドクターヘリが上空を行き来する様子も日常的で、昼食場所となる食堂も病院スタッフと一緒にという、まさに医療を身近に感じることができる環境で学生は 4 年間過ごします。

2024 年 4 月現在、専任教員 21 名(うち臨床検査技師免許保有者 15 名)の下、172 名の学生が当学科に在籍しています。「すぐれた臨床家であれ」のスローガンの下、国内有数規模の 2,700 床を有する病院群(埼玉医科大学病院、埼玉医科大学国際医療センター、埼玉医科大学総合医療センター)を中心とした臨床現場を肌で学び、最先端の医療技術や患者さんと向き合う姿勢を学びながら、す

ぐれた医療人としての将来像を描いていきます。また、学生一人一人が知識とともにスキルを身につけることを大切に考え、学内実習においては生理機能検査で用いる医療機器を中心に、十分な台数の機材を揃えて教育を実施しています(写真 2)。また講義や学内実習においては医学部教員や病院臨床検査部勤務の臨床検査技師から直接学ぶ機会も設けており、実践力の育成にも力をいれています。

III. 教育の特徴について

1. 医療人としての心構えを初年度から学ぶ

「医療の基本」という科目を通じて、患者やその家族はもちろん、さらに他の医療スタッフからも信頼される医療人を目指して、基本的なコミュニケーションから医療人に求められる倫理感まで学



写真2 生理機能検査実習用機器類

んでいます。さらに頭痛やめまいといったよくある症候の病態やそれに伴う生活上の変化などについても学んでいきます。

いずれもグループワークを中心に演習形式で行われることから、自然とコミュニケーションが取れるようになります。さらに、埼玉医科大学には医学部医学科、保健医療学部があり、保健医療学部には臨床検査学科のほかに看護学科、臨床工学科、理学療法学科があります。この特徴をいかして、医学科を含めた5学科混成の少人数グループを編成し、専門職連携教育 (IPE: Interprofessional Education) として「ヒヤリ・ハット」事例の根本原因分析を行います。

2. 臨床検査技師になるというモチベーションを維持する

どの養成校においても、入学後のモチベーション低下は取り組むべき優先度の高い教育上の問題となっているのではないのでしょうか。大学の場合、入学後最初に学ぶことが教養系科目であることが多く、入学前に描いていた医療の学びのイメージと大きく乖離してしまうことも原因であると思われます。このことが指摘されて久しいですが、教育上の大きな問題であるにも関わらず、カリキュラムとして検討されずに来ていることもまた事実です。

埼玉医科大学では2022年度のカリキュラム再編時に1年生を対象とする「基礎臨床検査技術」いう演習科目を新設しました。ここでは白衣の着方、医療廃棄物などの検査室から出るゴミの分別

といった「約束事」から始まり、試薬調整に必要な単位の考え方や濃度計算、専門科目の実習において必須となるマイクロピペット、顕微鏡や遠心器の使用方法を学び、それを使って臨床化学実験の基礎となる吸光度測定、電気泳動などに活かすところまで行います。さらに使い方を覚えた顕微鏡で観察するための血液塗抹標本の作製を目標に、静脈採血方法 (模擬採血) 2コマ、採血した血液の取扱い (採血管の種類)、検体分離で2コマといった前段階を経て、ようやく血液塗抹標本の作製にとりかかります。その後、染色の意味を知ってもらうため作製した標本を用い、無染色標本との違いを確認し、目的物を明らかにするために染色を行うということを知ってもらいます。また上位学年での生理機能検査につなげる目的で、酸素飽和度測定などを通じてバイタルサインについて学びます。

3. 大学病院診療科の医師から学ぶ「ヒトの病気」

「すぐれた臨床家になる」ために、学部に所属する医師はもちろん、大学病院で診療に従事している医師から直接学ぶ「ヒトの病気」という講義があります。低学年で学ぶため、学生にとっては少し難解に感じることもあるようですが、上位学年に上がってから振り返ると役立つことも多いようです。呼吸器、内分泌、整形外科など各回が大学病院の診療科のように区分されており、さらに例えば呼吸器であればそれを5回に細分して詳しく教授しています。第一線で働く臨床医から受ける講義は刺激的で、豊富な事例から学ぶとともに、

こういった疾患の成り立ちや診断を学びながら、臨床検査がどのようにかかわっていくのかを知る良い機会になっています。

おわりに—地名の難解な読み方で悩まされる 埼玉医科大学の周辺—

埼玉医科大学のある埼玉県西部のなかでも南に位置する日高市や毛呂山町は、漢字の読み方の難しい地名があります。まず「毛呂山」ですが、初めて訪ねていらした方は「けろやま」と読まれることがあります。これは「もろやま」が正解です。またキャンパスの近くには「高麗神社」という、天皇皇后両陛下（現在の上皇上皇后陛下）も参拝された歴史ある神社があります。また最寄り駅となるJR駅が「高麗川駅」ですが、この「高麗」を「こうらい」と間違っ

て読む方がいらっしやいます。正しくは「こま」です。また高麗川駅からキャンパスまでには「板仏」「四本木」など、あまり聞きなれないバス停留所が続きます。ところで、キャンパスのある日高市は「遠足の聖地」だそうで、巾着田という名所があります（私はまだ訪ねていま

せんが）。高麗川駅からその巾着田へ向かうバスの停留所に「猿田」（もちろん‘さるた’でも‘えんだ’でもありません）という読める人はいるのだろうか？という疑問にさえ感じるものもあります。どうやら埼玉医科大学があるこの地は歴史的に見るとかなり古くから人の往来があった（近くに関東諸国を結ぶ鎌倉街道が通っていた）ようで、この県西南部地区には多くの傑出した医師（例えば最初に帝王切開術を試みた伊古田純道と岡部均平など）たちがいたことも興味深いです。埼玉医科大学にいらしていただいたことがあればお判りいただけますが、このようなところ（失礼！）に医科大学があること、さらには高度先進医療を提供する大学病院がすぐ近くに2つもあることに疑問を抱かないはずがありません。

この地に医科大学が設立され、医療職を目指す学生の教育がなされていることに、歴史がもつ必然的なつながりを感じております。歴史に興味がある方は、ぜひ埼玉の地へお越しいただければと存じます。